

二〇三三年三月二四日

湯の郷の宿ウエルカム蕨餅  
喬木の辛夷が苑の丘統ぶる  
一幅の花の絵となる玻璃戸かな  
谷筋を埋めつくして山桜  
水漬きたる芽柳つつく稚魚の群れ

むべ  
はく子  
あひる  
千鶴  
智恵子

二〇三三年三月二三日

子を連れて謝りにゆく春の宵  
花見頃とて駐屯地開放す  
似し声で彼岸の経誦す老姉妹  
仲良しのおててつないで卒園す  
母として花の母校を訪ひにけり

ひのと  
そうけい  
なつき  
たか子  
ひのと

二〇三三年三月二二日

相輪は四方の春光あつめけり  
三極の森を黄金に染む夕日  
子遍路のリュックの小鈴よく鳴りぬ  
大き尻振りて中州の春の鴨

ぼんこ  
素秀  
なつき  
なつき

二〇三三年三月二一日

夫帰る右手いつぱい土筆持ち  
林立の力士幟や街は春  
野遊びや橋なき川に行き止まる  
一両車傾きゆける花菜畑  
観音のそびら明るし白木蓮

明日香  
こすもす  
千鶴  
素秀  
うつき

二〇三三年三月二〇日

うららかやお礼参りの車椅子  
な踏みそと犬抱き上ぐるげ花菫  
はくれんの今合掌を解かんとす  
子が踏んでゆきし土筆も摘みにけり  
吾が決めし標準木に初桜  
春天の飛機彗星のごと速し

やよい  
かえる  
素秀  
なつき  
たか子  
みきえ

二〇三三年三月一九日

大蕨よりをどりでし春の月  
カラフルなパラグライダー山笑ふ  
薄紙にお顔を包み雛納む  
春愁の受話器の母を励ましぬ

よし子  
こすもす  
ぼんこ  
むべ

二〇三三年三月一八日

行きゆきて戻るも楽し花堤  
春愁や余生惜しむにあらねども  
校長は達筆と知る卒業式

せいじ  
宏虎  
豊実

毎日句会みのる選・二〇三三年三月二六日